

第3回は公開講座 「お浄土とは何ですか？」

第3回 テーマ 「お浄土とは何ですか？」

公開講座

よしぎき てっしん 吉崎 哲真

講師紹介



昭和28年2月22日生 西法寺(湯来町)住職/ 本願寺派布教使/保護司

標高500m、民家8軒の過疎寺院の住職。現在61才、村で私より若いのは坊守だけ。ずっと村一番の若者です。村の人達のお葬式を全部勤めてから死ぬことが目標です。趣味は読書と車。

平成27年1月末日、東区民文化センターにおいて第3回目の「れんけん」を実施、広陵東組寺族部会との合同開催という事で、連研受講者の他、仏教壮年会及び婦人会の役員方など、総勢四十名以上のご参加を頂きました。

寺族部会、武田達裕部長(広寂寺)は「現代において浄土をいかに説いてゆくかということ」は主要な問題であります。今回の連研のテーマが「浄土」についてなので、部会の共催として参加させて頂きました。と挨拶。

聞けば分かるか？

浄土って何ですか？と問いかけてある。そこには質問者の「聞けば分かるだろう」という前提がある。私達は本当に聞きさえすれば分かるのか？ 『一水四見』というお経の譬えがある。水一つに立場の違う四つの見方があるという。人間は水を水と見るが、魚にとって

何も分からぬ

は棲家である。餓鬼道に堕ちた者は膿血に見え、天人にとってはそれが瑠璃、つまり宝石となる。この話を聞いて、さて天人の見方でコップ一杯の水を眺めてみようと思う。我が手には溢れんばかりの寶石。何と豊かな時間であろうか・・・と、そうはいかない。人にとって水はありふれた水でしかない。聞けば分かるというものではないのだ。

無量が分からない

浄土の世界は「教行信証」の「真仏土巻」に顕される。「仏説無量寿経」における法蔵菩薩の誓願、光明無量の願(第十二願)と、寿命無量の願(第十三願)に報いて建てられた世界、それが浄土だ。無量とはへ量る

舎息



最新

近、ネットショッピングで買い物をする機会が増えてきた。やり始めはお店に買い物に行く時間がないとか、欲しい物が見当たらないことが理由だった。個人情報

ほっとひといき

しかし、最近それも出来なくなっている気がする。それは、ネットショッピングにでてる。あなたにお勧めの商品。これを買った人はこれも買っています。というデータを基にした商品の数々。日ごとに沢山の人のデータを蓄積し、こういう人はこれ！と「凶星！」自分よりも自分の性格を把握している。コンピューターなるものが普及して、随分便利になった。今まで出来なかつた事が瞬時にできる。沢山の情報が保存されていく。実に効率的だ。合理的でなおかつ効率的これが非常に魅力的に感じられる。コンピューターは更に進化し、人工知能へとなりつつある。いろんなデータを蓄積し、考えてくれるのだ。何れ、人は考えなくてもコンピューターが考えてくれる。そして、機械の言う通りにすれば、無難な人生を生きていける。何の不自由もない。困る事も無い、そつなつたら人は次に何を思うのだろうか。私の心を満たしてくれるものとは一体何だろうか？

時間を超えた世界

私達は命を時間的なものとして捉えている。死んでからも命があるのかと考えることも、死んだらお終いよと思うのも、時間的な考え方。それに対して、

【裏面へ続く】

【前面の続き】

時間を越えた世界をどう理解すればいいの。辛うじて私達が考えられるのは時間を引き延ばすことに過ぎない。「現在」から考えて「たぶん生まれる前もあつたんだろう。それなら死んでからもあるんじゃないか」と前後に時間を拡張し、時間が「ある」という捉え方を。だから占いか何かで、「あなたの前世は〇〇です」と言われると、そうかなと思ってしまう。死後にも存在するというのなら「靈魂みたいなものがあるんだろうか」と考える。これらは全て時間に捉われた議論でしかない。「ある」と考えた時点で、「ない」が生じる。つまり「いつでも」と言えなくなってしまうのだ。

空間を超えた世界

「どこでも」というのは空間のこと。どこにでも届くということ、空間の概念が必要ないということだ。それでも經典には「十萬億の仏土を過ぎて世界



あり・・・」などと空間的な表現が出てくるので「そんな遠いところから阿彌陀様はどうやって来られるんだろう？」と考える。しかし、どうやって来られるのかと考えた時点で、阿彌陀様がいない隙間が生じたことになる。「どこでも」とはならないのだ。

今(ここ)に居る(ここ)に居る

時間と空間に縛られている私達には「今ここに居る」という意識がある。それは過去と未来という時間を持たないと成り立たない意識だ。「今ここに居る」ということは「ここではない」過去に居た空間を知らなければならぬ。「今ここに居る。でも朝は家にいました」と。

それと同時に未来も持っている。たとえば「この講座の後に懇親会があるって聞いてるけど、夕飯作らないといけないし、どうしようかな？」と考えながら「今」を過ごしている。

時間と空間に依らなければ、私達には「今ここに居る」ということが分からない。そんな頭の中で、時間と空間を超越した「いつでも、どこでも」の仏様の世界を構築しようとしている。それはどうあっても無理なことなのだ。

迷いを知る

真言宗の空海さんは、仏道を歩む理由として「生まれ生まれ生まれ生まれ生きて生のはじめに暗し。死に死に死に死んで死の終

わりに冥し」と仰った。自分はどこから来たのか知らない、またどこに行くのかも知らない。「くらい」とは分からないということ。つまり「無明」の迷いの身であるという自覚が出家の前提にあるのだ。

しかし、自らを迷いの身とするのは、向かうべき道、正しい方向性をはっきりしているから言えること。そもそも正しい方向を知らなければ、自分が迷っているということさえ気付けない。だから仏様は私達が迷っているということを教え、向かうべき方向を示して下さる。それを「西方浄土」と、西の方角で

何(ここ)よってか西(西)にある



何故、浄土は西にあるのか？中国の高僧、曇鸞大師に時の國王が訪ねてきたという。その応対が親鸞聖人のご和讃にある。

鸞師こたへてのたまわくわが身は智慧あさくしていまだ地位にいらざれば念力ひとしくおよばれず

曇鸞大師は「自分は未熟です。お悟りの地位に未だ至っておりません。そんな私ですから、お

浄土のことが分からない。捉えようがない。だから、阿彌陀様が愚かな私のために、西にいるよとお示し下さった。「そういう意をお答えになられた。

ある先生は自分の子供から同じような質問をされた。「阿彌陀様に足を向けて寝るわけにはいきまい。阿彌陀様がいらっしゃる方角が分かれば、そんな心配をせず安心して寝られるというものだ。」

無いならばつくる

そのように浄土を「理」で説く一方で、「情」で説かれる部分がお経にはある。分かりやすいのは阿彌陀經の「俱会一処」。親しい人と俱に会わせて頂く世界が浄土である。

ある作家の奥さんが重病を患ってもう先が長くない。奥さんは主人にこう言った。「あの世があるかないか知りませんが、私はあなたとこの世で出遇い、共に過ごした人生が幸せでしたから、たとえこの世だけであの世がなくとも、何の後悔もありません。ありがとございました。」

旦那さんはどう答えたか。「あの世がなくなるとどうする。あの世がなくなったらお前と会えないじゃ



講座終了後は和気あいあいと懇親会

ないか。もし無いのなら私がつくらねばならん。」

私達は、かけがえのない人と人生で出遇い、そして必ず別れていく。果たして別れればなしでいいの。へもし無いのなら私がつくらねばならん。ちよつとこの言葉を呟いてみて、阿彌陀様が「俱会一処」の浄土をつくられたその願いを味わってみてはどうだろう。

阿彌陀様は、別れ、苦しみ、悲歎に暮れる私達に、どんなことがあっても出遇って行かねばならない、真実に目覚めさせねばならないと願われ、浄土の世界を顕された。無量の浄土は分

(文責・諏訪義円)

第5回れんげんの御案内 「自分らしさとは？」 講師：藤 哲哉 師 (中区中島町 善福寺) ●日時 2015 (平成27) 年4月25日 (土) 午後1時30分～午後4時 ●場所 本願寺広島別院 (中区寺町)

しつかり身に付く 仏事作法指南道場

第3回 お仏壇のお荘厳

久保田晃裕 (報恩寺副住職) が、お仏壇についての心構えを指南。

▼お仏壇は、死者の棲家ではない。仏様のいらっしゃる浄土の様相を顕したものだ。原則、仏様に関するもの以外は飾つたり御供えしないようにしましょう。 ▼お仏壇を家にお迎えするということは、仏様中心の生活になるということ。私の生き方を常に仏様のみ教えに尋ねながら、生活させて頂きましょう。

▼お仏壇をご安置する場所について。浄土真宗は古いや方角などの迷信に惑わされませんが、お仏壇―仏様をお迎えした以上、そこが家庭の中心となります。なるべく皆の目に触れ、人の集まる部屋にご安置し、大切にしましょう。



●配布資料「仏壇の飾り方」をご参照の上、正しいお荘厳を心掛けて下さい。